

王漁洋の「南唐宮詞八首」について

著者	荒井 禮
雑誌名	中国文化：研究と教育
巻	72
ページ	14-26
発行年	2014
URL	http://doi.org/10.15068/00151000

王漁洋の「南唐宮詞八首」について

荒井 禮

はじめに

中唐の王建以降、「宮詞」という詩の一ジャンルが確立された。その主な定義は、宮廷内部の様子を描写していることであり、対象の多くは宮廷で暮らす宮女たちである。よって、なよやかで艶めかしい描写も多く、六朝に流行した「宮体詩」と混同されることがある。しかし、「宮体詩」

がそうした繊弱華麗な描写を追求する詩体であるのとは異なり、「宮詞」はあくまで宮廷内部の様子を描くことに重点が置かれており、天子が政治に臨む姿や宮廷内部に暮らす漁民といったものも描写対象であって、必ずしも艶麗な内容が要求されるということはない。また、多く七言絶句の型式がとられる。これが、「宮詞」の特徴であり、「宮体詩」との決定的な違いでもある。^①

清の王漁洋（一六三四～一七一）の「南唐宮詞八首」^②

は、詩型は七言絶句であり、形式上は王建以来の一般的なものである。しかし、その内容はやや異なる。右に挙げた「宮詞」の特徴と重なる部分も多くあるが、異なる所も確かに存在する。その差異は、南唐という時代への憧憬に由来しているようである。漁洋に先行する詩に、明・范汭の「南唐宮詞四首」（清・錢謙益撰『列朝詩集』丁集・卷一四）があるが、漁洋の詩とは趣がやや異なる。そこで、「南唐宮詞八首」の内容を考察すると共に、范氏の「南唐宮詞四首」を比較対象の中心とし、同時に他の作家の「宮詞」も比較して具体的な差異を明らかにし、王漁洋がなぜ南唐という時代を詠じたのかを考えてみたい。以降、漁洋の詩を言う場合は「南唐八首」、范汭の詩は「南唐四首」と表記する。

一、「南唐宮詞八首」概観

「南唐宮詞」は、時代名を冠した「宮詞」である。このように、「○○宮詞」と特定の王朝名や年号が冠される詩は、「南唐宮詞」以外にも確認できる。たとえば、「明宮詞」(清・程嗣章)や「清宮詞」(清・九鐘主人)、あるいは、「天寶宮詞」(元・顧瑛)や「弘治宮詞」(明・王世貞)などである。このような宮詞は、諷刺が含まれる傾向にあり、描写対象も必然的に題名となっている時代に限定される。

また、「連昌宮詞」(唐・元稹)・「永和宮詞」(清・吳偉業)のように、特定の宮殿名を冠し、長篇の古詩で綴られた「宮詞」もある。この「宮詞」は、宮殿に関する出来事や人物が主として描写され、諷刺や、特定の時代への慨嘆が含まれることもある。⁽⁴⁾他に、四首で構成され、それぞれ宮中の春夏秋冬を詠じた「四時宮詞」(元・薩都刺)といったものがある。

こうした特徴を持つ特殊な「宮詞」は、詠じられている人物や出来事を、ある程度は特定することができる。例えば、元・張昱の「天寶宮詞十五首」其三は、李白が「清平調詞三首」を制作し、それが元で左遷された事件を描いている。⁽⁵⁾これは、「一般的な宮詞」(以降、特に時代名などを

冠さない「宮詞」をこのように称する)には見られない特徴である。⁽⁶⁾

「南唐八首」にも、特定の人物や出来事が確認できる。しかも、それらは次のように時系列に配されている。

其一―烈祖李昇の南唐建国。呉王李璟(後の中主)に

武術指南をさせる。

其二―中主の時代。宮中での茶の流行。⁽⁷⁾

其三―中主の時代。女道士耿先生、鍊金術を披露。

其四―周后、後主李煜の求めに応じて「邀醉舞破」を作る。

其五―宝物庫澄心堂を守る保儀黃氏。

其六―周后・小周后、「念家山」を歌う。後宮における「念家山」の流行。

其七―夜、宮殿にたくさんのお宝珠を掛けて、灯りの代わりとした故事。

其八―長江を越えて南唐に迫る宋の水上軍(南唐の滅亡)。

初代李昇―二代李璟―三代李煜、というように、南唐の特徴的な出来事や人物を世代順にまとめて描いており、さながら、南唐小史とも呼べるような体裁をもっており、詠史詩的な側面を有していることが分かる。連作の冒頭を、

講武銅駝始代具

武を銅駝に講ぜしめて 始めて具に代はり

広陵宮觀接西都

広陵の宮觀 西都に接す

殿中并進龜茲樂

殿中 並びに進む 龜茲の樂

江表新伝入貢図

江表 新たに伝ふ 入貢の図

〔南唐八首〕其一⁽⁸⁾

と、建国の様子で飾り、

重午龍舟歲歲陳

重午 龍舟 歲歲 陳なり

輕鳧飛燕各如雲

輕鳧 飛燕 各おの雲の如し

瓦官閣下黃花漲

瓦官閣下 黃花漲り

別有淩波水上軍

別に有り 淩波 水上の軍

〔南唐八首〕其八

と、南唐滅亡を暗示させる詩で連作の幕を下ろす。このように、一王朝の興亡を一連作の中で描きだす「宮詞」は、

〔南唐八首〕以外には見られない。

漁洋に先行する范洸の「南唐四首」其一是、二代目李璟の時、後周の顯徳五年（九五八）、周軍に攻められて、滁州などの淮南の一四州を割譲したところ（馬氏「南唐書」卷三〇）、南唐衰退の端緒から始まる。

桃李花開点御溝

桃李 花開きて御溝に点ずれば

翠華経月不曾游

翠華 月を経るも 曾て游ばず

内庭鴟吻移鴟尾 内庭 鴟吻より鴟尾に移るのみ

莫問君王十四州 君王の十四州を問ふもの莫し

右の詩は、金陵の宮殿での楽しみに耽ることができればそれでよく、割譲した淮南の一四州を問題にするものはいなかったという意である。南唐政權の華やかさと同時に暗愚な面をも写し出している。以降、范氏「南唐四首」は、耿先生（其二）・昭恵周后（其三）・小周后（其四）と、一貫して宮女を描き、王朝の終末には言及されていない。漁洋が南唐の興亡まで描いたのとは異なっている。

明・朱有燉「元宮詞一百首」⁽¹⁰⁾は、序文で、「元代宮庭事跡無足觀。然紀其事實、亦可備史氏之採摭焉（元代宮庭の事跡は觀るに足る無し。然れども其の事實を紀し、亦た史氏の採摭に備ふべし）」と述べているが、元代の興亡を伝えるには至っていない。一般的に、「宮詞」全体の傾向としては、范氏のように、あくまで「宮庭の事跡」を伝えることが主なのであって、本来、国の興亡まで描く必要はないのである。

以上のことから、一時代の勃興から滅亡までを描ききる「南唐八首」が「宮詞」の中でも特殊な部類に入ることが分かる。しかも、八首の中、四首を宮女の描写が占め、宮中の行事や流行をも描いていることから、「一般的な宮詞」

の特徴も備えていると言える。こうした特徴を備えながら、時代の興亡を時系列に沿って描くことができたのは、南唐王朝が短命であったことにもよるであろうが、王漁洋自身にも、南唐に対する特殊な思いがあつたはずである。そうでなければ、「南唐四首」のように、宮女の生態を描写するのに終始した作品であつても良かつたはずである。

二、宮女の描写について

「宮詞」の主役は宮女たちである。この宮女の描写も様々である。例えば、後蜀の花蕊夫人の「宮詞」に描かれる宮女像は、自身の投影である。作者自身が宮女であるが故に、宮中での生活をありのままに伝えるが、夫人自身が寵愛を受けていたためか、「宮怨」の要素が乏しい。王建の「宮詞」は、反対に「宮怨」を描いたものが多い。また、五代・和凝の「宮詞」は、理想の天子像を描くことに意を注ぎ、結果、天子への不満ともとれる「宮怨」を描くことはなかつた。¹¹⁾

このように、宮女の描写は作者によって違いを見せるが、基本的に、詠じられる宮女が何者であるかを詩の本文から特定することはできない。

しかし、「南唐八首」は、先に概観したように、宮女が

誰であるかが明確に分かる。しかも、その宮女たちは、彼女たちしか持ちえない固有の特徴と共に描出される。例えば、女道士耿先生を詠じた其三では、

細雪霏霏落院門　細雪　霏霏として　院門に落ち
金鋪鴛鴦早黄昏　金鋪　鴛鴦（人）　早に黄昏

宮中玉女隨君側　宮中の玉女　君の側に随ひ

搏得春冰帶爪痕　春冰を搏め得て　爪痕を帯ぶ

と、いかにも道土らしく、鍊金術を披露する様子を活写している。これは確かに馬令『南唐書』に取材したものである。¹²⁾

また、其五は、保儀黃氏について詠じる。

簾錦鸞綾万卷殊　簾錦　鸞綾　万卷　殊なれり

澄心堂裏皂羅厨　澄心堂裏　皂羅（ま）の厨（ば）

保儀玉貌空傾国　保儀の玉貌　空しく傾国

妙選深宮但掌書　深宮に妙選せられて　但だ書を掌

るのみ

保儀黃氏は、美貌と学問を兼ね備えた才媛で、後主のお気に入りであつたが、小周后が寵愛を独占したために、顧みられなくなつた。しかし、彼女の学問的な才能（とりわけ書芸術の理解）に対する後主の信頼は厚く、後主の書籍の管理を一手に任された。¹³⁾ 其五は、房内での寵愛を失つた

「宮怨」という一面と同時に、保儀の才能を称賛する一面も有している。

次に挙げる其四は、後主の後である昭恵周后を詠じたものである。

曾邀醉舞媚君王 曾て醉舞を邀めて 君王に媚ぶ

鬢朶珠翹別様妝 鬢朶 珠翹 別様の妝

紅燭当筵新破就 紅燭 筵に当たりて 新破就る

更将金屑譜霓裳 更に金屑を將て 霓裳を譜す

詩は、李煜が舞を披露するかわりに、周后が新曲「邀醉舞破」を作ったこと、また、唐代に失われた「霓裳羽衣曲」を復活させたことを言う。また、第二句は、周后が宮中で

のファッションリーダーであったことをも示している。こうした描写は、周后が技芸に秀でていたこと、宮女たちの

憧憬的であったことを称揚しているようである。馬令は、周后や小周后といった宮女たちが、南唐滅亡の温床だった

かのように書いている。¹⁵しかし、馬氏は周后の伝記を「女憲伝」の中に列している。「女憲」とは、貞順な女性のこ

とで、女性の鑑となるべき人である。実際、馬氏「南唐書」

の周后伝には、「后雖在妙齡、婦順母儀、宛如老成（后妙齡に在りと雖も、婦順母儀にして、宛も老成するが如し）」

とか、「后雖病亟、爽邁如常（后病亟まると雖も、爽邁た

ること常の如し）」というように、その女性の徳を称賛する記述がある。これまでの王漁洋の詩が、鍊金術・書籍管理能力といった宮女の個人的な才能を述べていたことを考慮すれば、周后を詠じたこの詩も、彼女を滅亡の火種として描くというよりは、文化的側面を前面に押し出したものと言えるであろう。

范氏の「南唐四首」も、漁洋と同じように、女道士耿先生・昭恵周后を詠じている。耿先生については、女道士としての特徴をとらえた詩で、漁洋の描写と変わらない。¹⁶ここでは、比較の対象として周后を詠じた其三を挙げる。

半檐日影漾翠暉 半檐の日影 翠暉に漾ふ

纔是深宮夢覺時 纔かに是れ 深宮 夢より覚むる

の時

勅取燒槽彈法曲 勅して 燒槽を取りて 法曲を弾

ぜしむ

声声訴恨來遲 声声 声訴して 來たること遅き

を恨む

漁洋の詩（其四）のように、琵琶（燒槽）の演奏を得意としていた一面が画かれている。しかし、漁洋詩に見えた華やかさや、「霓裳羽衣曲」を復活させた功績などは、范訥の詩からは窺い得ない。そうした技術的な側面よりも、

むしろ、後主からのお誘いがなかなかこないことへの怨み
が中心となっている。専ら「宮怨」の側面を詠じたために、
周後の個性が却って減じてしまっている。次に挙げる「南
唐四首」其四は、后となる前の小周后（周後の妹）と後主
の密会を敷衍したものであり、やはり「宮怨」の側面が強
い。

苑門深閨柳千条 苑門の深閨 柳千条

銀箭聴残夜寂寥 銀箭 聴残して 夜寂寥たり

剗襪下階差見影 剗襪して階を下りて 影を見るに

差つ

不知斜月弄芭蕉 知らず 斜月の芭蕉を弄せしを

詩は、深夜待ち合わせ場所に来たけれども、まだ後主の
姿はなく、月に照らされた芭蕉の影を後主と勘違いしたこ
とを描く。『南唐書』に密会を匂わせる記述があるために、
小周后を描いたものと分かるが、漁洋の詩のように、宮女
の特徴が画かれているわけではなく、他の宮女に置き換え
て見ることもできてしまう。

范洎と王漁洋二人の違いを端的にまとめれば、范洎は故
事を描写することに意を注いでおり、漁洋はそれに加えて
宮女の個性にも注目するほか、南唐の興亡をきつちりと描
くなど視野が広くなっているのだと言える。ただ、女道士

の描写や、『南唐書』に見える印象的な故事から題材を採
択しているといった共通点もあることから、漁洋が范洎の
詩に触発され、それを発展させたということは考えられる。
しかし、二人の違いは右に見てきたとおりであり、「南
唐八首」のように、連作の形態をとって、中主・後主二代
の幾人かの特定の宮女を詠じ、各々の個性的な才能を描き
出す「宮詞」は、他に類を見ないものであると言える。

例えば、王建「宮詞」其二二（『王司馬集』巻八）に、

射生宮女宿紅妝 射生の宮女 紅妝を宿し

請得新弓各自張 請ひて新弓を得て各おの自ら張る

臨上馬時齋賜酒 馬上に上らんとする時に臨みて 齋

して酒を賜はり

男兒跪拜謝君王 男兒のごとく跪拜し 君王に謝す

とある。この、あらかじめ化粧を施したうえ、射手の格好
をして天子と共に狩りに出たという宮女が、唐の武帝
の王賢妃だという説があるが、坂野学氏は、王建の生存し
ていたのが、武帝より前の時代であるために、この説は採
用できないとし、また、「王建作品の特徴は、質朴・率
直・含蓄無しである」と述べている。そもそも、第二句に
「各おの自ら張る」と言うように、ここに描かれている「射
生宮女」が不特定多数の宮女であることは明らかであり、

王建の詩では固有の才能が詠じられているとは言えない。

また、明代最後の皇帝崇禎帝の妃である田貴妃の伝記と言われる呉偉業の「永和宮詞」も、「南唐宮詞」のように特定の宮女（田貴妃）を詠じ、且つ、美貌と文芸に秀でていたと、才能の称揚も行われている。⁽¹⁹⁾しかし、田貴妃以外の宮女の描写はなく、その背景は崇禎帝の御代に限られている。宮殿名を冠した「宮詞」は、特定の宮殿に係する宮女・故事にスポットが当てられるため、自然と時代背景も限られてくるのであろう。この形式の「宮詞」は、一個人や至極限られた故事を詠じ、その内容に自身の心情や時代背景を倒影させるのには適しているが、一王朝の興亡までも描き出すのには適していないようである。

三、諷諭性について

「宮詞」に諷諭性があるという指摘は早くからある。しかし、楊維禎は、

宮辞、詩家之大香奩也。不許村学究語。為本朝宮辞者多矣。或拘於用典故、又或拘於用国語、皆損詩体（宮辞十二首序）。

（宮辞とは、詩家の大香奩なり。村学究の語を許さず。本朝の宮辞を為る者多し。或いは典故を用ふるに拘り、

又た或いは国語を用ふるに拘りて、皆詩体を損ふ）。

と、「宮詞」は華麗な詩体が本領であって、学者然として手を加えるのは宜しくないと言う。坂野学氏も、王建の「宮詞」を考察した上で、「宮詞」を諷諭詩と見なし、その批判の有り様を説明しようとすれば、固定的な批判的読み縛られ詩中の字句をかなり強引に解釈することになるだけで、実際の詩の内容とは大きくはずれてしまうのである」と述べている。坂野氏が主に論じているのは王建の「宮詞」であるが、楊維禎の序文と併せて考えると、もと「宮詞」は諷諭を意図したものではないということになる。ただし、時代名を冠した「宮詞」には諷諭の意図が込められることが、ままたまあることは、すでに指摘したとおりである。

では、「南唐八首」に諷諭性はあるのであろうか。錢仲聯氏は、「漁洋の『南唐宮詞』は比較的に雅であって、南唐が国を滅ぼしたことに仮託して、福王のことを描いているのだ」と述べている。錢氏の言う「福王」とは、明末の北京陥落後に、南京で擁立された明の皇族朱由崧のことであり、また、彼を皇帝に戴いた福王政権のことを包括して言ったものであろう。福王は政治に目を向けず、奢侈に耽った結果、北京陥落（崇禎一七年、一六四四）から、僅

か一年足らずで南京に建てた暫定王朝を滅ぼしてしまつた。⁽²¹⁾
福王を亡国の君主である李煜に擬えたという見解は、漁洋
が明末清初の詩人であることを考えれば、無視できないも
のではある。

福王を諷諭したものとは断言できないが、ある種の諷諭
が込められているような詩もある。「南唐八首」其六である。

御溝桃葉水潺潺 御溝の桃葉 水 潺潺

姉妹承恩并玉顔 姉妹 恩を承けて 玉顔を并ぶ

花底自成金葉格 花底 自づから成る 金葉格

宮中斉唱念家山 宮中 斉しく唱ふ 念家山

詩中に見える「念家山」とは、李煜が作つた「念家山破」
のことで、馬令『南唐書』に於いても不吉な予兆と見做さ
れていた。⁽²²⁾この詩に対し、清・伊応鼎は次のような注を付
している。

桃葉以比周后姉妹、御溝之水以比君恩。下二句、言其
荒於嬉戲、六宮化之、從風而靡。敗亡之徵已見、而恬
不知悟也（『漁洋山人精華録会心偶筆』卷六）。

（桃葉は以て周后姉妹に比し、御溝の水は以て君恩に
比す。下の二句、其れ嬉戲に荒みて、六宮之れに化し、
風に従ひて靡くを言ふ。敗亡の徴已に見はるるも、恬
として知悟せざるなり）。

錢氏の論は、この伊応鼎の注釈を元にしたものであろう。
ところで、実際に「南唐八首」に諷諭の旨が込められて
いるか否かを断定することには、もう少し慎重になる必要
がある。王漁洋の南唐に対する評価が非常に高いからであ
る。彼は、「政合刻馬令陸游南唐書」（卷九一）に於いて、
五代にあつて正統な王朝は南唐であると強く主張する。⁽²³⁾ま
た、後主李煜に対する評価も非常に高く、「後主仁愛、無
荒淫失德、……亦非以歌舞為兵端（後主仁愛にして、荒淫
もて徳を失ふこと無し、……亦た歌舞を以て兵端と為すに
非ず）」（『古夫于亭雜録』卷五）と論じている。正統な王
朝と見做し、仁愛の君主と述べる南唐の後主を福王に擬え
て諷諭の意を込めているとは考え難い。しかし、其の六に
は、同時に杜牧「泊秦淮」詩に、「商女は知らず亡国の恨み、
江を隔てて猶ほ唱ふ後庭花」と詠じられるような亡国の悲
哀が確かに窺える。伊応鼎も、この杜牧詩にまつわる故事
がその胸中にあつて、これに因つて諷諭性があると解釈し
たのであろう。ただし、南唐に対する憧憬ともとれる文化
的関心と、伊氏・錢氏が唱える福王への諷諭とは、直ちに
結びつくものとは言えない。

ここで、注目したいのは、「南唐八首」全体の構成である。
其六・其八に衰退・亡国の兆しが仄めかされているけれど

も、表面的には、其一から其八に至るまで徐々に繁栄していく様子が一貫して描かれている。其八さえも、前半二句は、「重午龍舟歳歳陳、輕鳧飛燕各如雲」と、端午節の競艇を楽しむ場面が描かれ、水面を走る舟も「龍舟」・「輕鳧」・「飛燕」と華麗な趣を伝えている。こうした面からも南唐に対する漁洋の憧憬の念が窺える。では、この憧憬は何に由来しているのか。それは、明末清初の動乱を体験したことが少なからず影響しているのであろう。制作当時、漁洋は二三歳であり、明・清を通じて、不安定な世界しか知らなかつたはずである。故に、其一では健全な軍隊によつて維持される泰平の世を描き、其二以降はまだ見ぬ繁華な世界を描写したのである。そこに、福王への諷諭など読みとすることはできない。ましてや、李煜を諷諭の対象として詠じるなどありえない。其六が繁華な一王朝の滅亡を暗示し、其八が宋の軍隊の侵攻を仄めかして終わっていたのは、諷諭が込められているというよりも、むしろ繁華な文化が失われたことに対する悲しみが含まれているようである。王漁洋の「南唐宮詞八首」は、華やかな文化的世界への憧憬と、そして、繁栄した文化の衰退に対する悲哀が融合してできた詩なのである。

おわりに

元来、「宮詞」の本領は宮中の秘事を詠ずることにあつた。その主役の多くは宮女たちであり、その表現は、自ずと華麗でなやかなものとなつた。特定の時代や場所の名などを冠した「宮詞」になると、華麗さは影を潜め、時代性が強調され、諷諭の意が込められるようになった。しかし、王漁洋の「南唐宮詞八首」は時代名を冠していながら諷諭性を持たず、「一般的な宮詞」の特徴と時代性を兼ね備えた稀有なものであつた。しかも、王朝の興亡を時系列に沿つて詠じるような詠史詩的な作品は他に見えない。その上、宮女たちの描写にも独自の工夫が見られ、先行する范洵の詩とも一線を画していた。従来「宮詞」のスタイルを取り込みつつ、新たな側面を開いたのである。このような詩を漁洋に作らせたのは、王朝交代期の動乱の体験と、その反動からくる泰平的・文化的世界への憧憬の念であつた。

注

(1) 劉澂選注「清宮詞選」(紫禁城出版社、一九八五)の序文に、
「談到宮詞、往往容易同宮体詩混為一談、其实這是文学史上
兩個不同的概念。……宮体詩雖云宮体、實際就是一種艷情

詩？ 却不一定是詠宮中人和事。宮詞は専ら宮廷内部生活為寫作対象的詩、一般都是七言絶句（宮詞といえば、しばしば宮体詩と混同されてしまいがちであるが、実際は文学史においては二つの異なる概念なのである。……宮体詩は宮体とは言っても、実は一種の艶情詩なのではないだろうか？ 意外なことに、宮廷の人物や事物を詠じる必要はないのである。宮詞は主として宮廷内部の生活を描写対象とした詩であり、一般的にはおおむね七言絶句の型式である）（邱良任執筆）とある。また、増田清秀氏は、唐五代の「宮詞」に見られる人物像を、「天子像」・「朝臣像」・「宮女像」・「漁民像」に大別し、それぞれの描写方法について詳述している。その中で、氏は「宮詞」の主役は、天子でもなく、朝臣でもなく、宮女である」と述べている（唐五代人作の「宮詞」に見られる人間群像、「学大國文」第二四号・増田清秀博士退官記念論文集上巻、一九八一）。

(2) 『帯経堂集』巻二。本論で引用する王漁洋の詩文は、統修四庫全書所収『帯経堂集』に拠る。

(3) 坂野学「王建『宮詞』小攷—その諷諭性をめぐって—」（『函館大学論究』第三一輯、二〇〇〇）を参照。氏は、明・秦徵蘭「天啓宮詞一百首」序を引いて後、「秦徵蘭は王建の『宮詞』に宦官の跋扈という時代の共通性を強く意識したのでろう。詩に自注を加筆することによって時代を漏らさずに告発しようとする」と述べている」と述べる。また、秦氏と同様の制作意図を持ったものとして、蔣之翘の「天啓宮詞一百三十六

首」を挙げている。本論引用の氏の説は、すべてこの文献に拠る。

(4) 「連昌宮詞」と「永和宮詞」については、竹村則行氏に「呉偉業『永和宮詞』における白居易『長恨歌』（および元稹『連昌宮詞』）の受容」（『徳島大学教養学部紀要（人文・社会科学）』第一八巻、一九八三）がある。氏は、当該論文において、「元稹の『連昌宮詞』は白居易の『長恨歌』よりも、むしろ『新楽府』の方により多くの関連性を持つという一応の結論を得ることができよう」と述べ、「呉偉業の『永和宮詞』には明末の宮廷を取り巻く血腥い政治情況がよりリアルに描かれている」と述べている。

(5) 『興慶池頭芍薬開、貴妃步辇看花来。可憐三首清平調、不博西涼酒一杯（興慶池頭芍薬開く、貴妃の步辇花を看んとして来たる。憐れむべし三首の清平調、博せず西涼の酒一杯）』（『可間老人集』巻二）。「西涼酒」は涼州の酒のことで、所謂「葡萄の美酒」を指す。作詩が元で左遷され、美酒を賜ることができなかつたことを言う。

(6) 例外もある。元・楊維禎の「宮辞十二首」其四（『鉄厓逸編注』巻八）などは、明らかに楊貴妃のことを描いている。「薫風殿閣日初長、南貢新来荔子香。西邸阿環方病齒、金籠分賜雪衣娘（薫風殿閣日初めて長し、南貢新たに來たりて荔子香る。西邸阿環方に齒を病み、金籠分賜す雪衣娘）。「阿環」は楊玉環（楊貴妃）のこと。「雪衣娘」は、白い鸚鵡のこと。楊維禎の「宮辞」は、特定の時代に拘らず、様々な歴史的故事

を詠じており、「宮詞」の中でも珍しい部類に入る。なお、「詞・辞」二字の差異はあるが、「遼金元宮詞」（北京古籍出版社、一九八八）が楊氏の「宮辞」を採用していることから、ここでは、「宮詞」と同義として扱う。

(7) 「内苑年年試揀芽、滄湖陽羨味無加。後宮近日添新貢、別尚松溪滴乳茶（内苑年年試みに芽を揀び、滄湖・陽羨味ひ加ふる無し。後宮近日新貢を添へ、別に尚ぶ松溪の滴乳茶）。

「滴乳茶」は、松溪（福建省）で産する「的乳茶」のこと。この詩が中主の時代を詠じているとするのは、宋・馬令『南唐書』巻二に、「保大四年二月壬戌朔、日有食之。命建州製の乳茶。号曰京挺。騰茶之貢、自此始。罷貢陽羨茶二月壬戌の朔、日之れを食する有り。建州に命じて的乳茶を製らしむ。号して京挺と曰ふ。騰茶の貢、此れ自り始まり、陽羨茶を貢ぐを罷む」とあるからである。「保大」は中主の年号。「建州」は福建省。

(8) 徐知誥（後に李昇と改名）が、十国の一つ呉から禅讓を承け国号を齊とし、元号を昇元としたのが、天祚（呉の年号）三年（九三七）の冬。昇元二年の四月、百官の求めに応じて、名を李昇とし、国号を唐（南唐）とした。銅駝橋に武を講ぜしめたのは、この年十一月のこと。この時、呉の讓皇楊溥が亡くなり、名実共に南唐の御代となる（天祚三年）冬十月、受吳禪、「（昇元二年）百官皆請、乃復姓李、改名昇、国号大唐。……十有一月、以步騎八万講武于銅橋。……讓皇殂」、馬令『南唐書』卷二）。故に、「講武銅駝始代吳」と言うのである。

(9) 宋の軍隊が長江を越えてやって来る様子を、馬令『南唐書』は次のように伝える。「開宝七年）每歲大江春夏暴漲。謂之葬花水。及王師至、水皆退小。故識者知其有天命焉（每歲大江春夏に暴漲す。之れを葬花水と謂ふ。王師の至るに及びて、水皆退小す。故に識者は其の天命有るを知れり）」（巻五）。

ここで言う「王師」は、宋の軍隊。漁洋の詩句に見える「黃花漲」は、「葬花水」のこと。また、「凌波」は、「凌波軍」という南唐の水軍のこと。競艇の成績優秀者が拔擢される習わしだった（同前）。漁洋詩は、南唐の凌波軍とは別に、葬花水の波を越えて宋の水軍が迫っていることを暗示させているのである。

(10) 「遼金元宮詞」一九頁より引用。

(11) 増田清秀「後蜀の花蕊夫人の『宮詞』」（『日本中国学会報』第三一集、一九七九）を参照。

(12) 「女冠耿先生、鳥爪玉貌、宛然神仙。……元宗召見、悅之、常止于臥内。……嘗擲雪為鏃、燕之成金、指痕隱然猶在（女冠耿先生、鳥爪玉貌、宛然として神仙のごとし。……元宗召見して、之れを悦び、常に臥内に止む。……嘗て雪を擲りて鏃を為り、之れを燕して金を成せば、指痕隱然として猶ほ在り）」（巻二四）。

(13) 「後主保儀黃氏、……甫數歲、奇其貌、内後宮。後主即位、選為保儀。容態華麗、冠絕当代、顧眄嚶笑、無不妍皎。其書学技能、皆出于天性。後主雖厲意、会小周專房、由是進御稀、而品秩不加、第以掌墨宝而已。……初、元宗・後主皆妙于筆

札、博取古書、……尤多鍾・王墨跡、皆繫保儀所掌。都城將陷、後主謂黃氏曰、「此皆吾所宝惜、城若不守、即焚之、無使散逸」。及城陷、凶籍俱燬、靡有遺者。黃氏隨後主俘至京師、卒（後主の保儀黃氏、……甫め數歳にして、其の貌を奇とせられ、後宮に内る。後主即位するや、選ばれて保儀と為る。容態華麗にして、当世に冠絶たり、顧眄讪笑、妍姣ならざるは無し。其の書学の技能、皆天性に出づ。後主意を属すと雖も、会たま小周房を専らにし、是れに由りて進御稀にして、品秩加へられず、第だ以て墨宝を掌るのみ。……初め、元宗・後主皆筆札に妙たりて、博く古書を取め、……尤も鍾・王の墨跡多し、皆保儀の掌る所に繋る。都城將に陥らんとし、後主黃氏に謂ひて曰く、「此れ皆吾の宝惜する所なり、城若し守らずんば、即ち之れを焚き、散逸せしむること無かれ」と。城の陥るに及び、凶籍俱に燬き、遺す者有る靡し。黃氏後主に随ひて俘せられて京師に至り、卒す）（馬令『南唐書』卷六）。保儀は、宝物の処理までも任され、最後まで後主に従つたのである。

(14) 宋・陸游『南唐書』卷一三に、「後主昭惠国后周氏、……通書史、善歌舞、尤工琵琶。……創為高髻織裳、及首翹鬢采之妝、人皆効之。嘗雪夜酣燕、举杯請後主起舞。後主曰、「汝能創為新声、則可矣」。后即命箋綴譜、喉無滞音、筆無停思、俄頃譜成、所謂『邀醉舞破』也。……故唐盛時、『霓裳羽衣』最為大曲、乱離之後、絶不復伝。后得殘譜、以琵琶奏之、于是開元・天宝之遺音、復伝于世（後主の昭惠国后周氏、……

書史に通じ、歌舞を善くし、尤も琵琶に工なり。……創めて高髻織裳、及び首翹鬢采の妝を為せば、人皆之れに効ふ。嘗て雪夜に酣燕し、杯を挙げて後主に起ちて舞はんことを請ふ。後主曰く、「汝能く新声を創為すれば、則ち可なり」と。后即ち箋を命じて譜を綴り、喉に滞音無く、筆に停思無くして、俄頃にして譜成る、所謂『邀醉舞破』なり。……故唐の盛時、『霓裳羽衣』最も大曲たるも、乱離の後、絶えて復た伝はず。后殘譜を得、琵琶を以て之れを奏す、是に于いて開元・天宝の遺音、復た世に伝はるる」とある。

(15) 「嗚呼、魯文公成礼于齊、『春秋』譏之、謂其非婚姻之正也。矧周氏御于宮中者數年、然後以迎礼帰之、吁可怪哉。……後世徳不勝色、肆情敗度、怨女以千數、淫費以万計、況乱世乎。……觀其樂府艷麗、則天機亦淺矣。後主・二周、抑又甚焉。故予悉書之、皆不免為『春秋』之罪人也（嗚呼、魯の文公礼を齊に成す、『春秋』之れを譏る、其の婚姻の正に非ざるを謂ふなり。矧んや周氏宮中に御すること數年にして、然る後に迎礼を以て之れを帰がしむるをや、吁怪しむべきかな。……後世徳色に勝らず、情を肆にして度を敗り、怨女は千を以て數へ、淫費は万を以て計ふ、況んや乱世をや。……其の樂府の艷麗なるを觀れば、則ち天機も亦た淺し。後主・二周、抑そも又た甚だし。故に予悉く之れを書す、皆『春秋』の罪人たるを免かれず）」（卷六）。

(16) 「齊家之法、在于女憲、而女之所以為憲者、母傾城之哲也、母索家之言也。究徳性之厚、原道化之本、不過于以順為事、

以貞為節而已。順・貞以化天下、何往不格哉（齊家の法は、女憲に在り、而して女の憲たる所以の者は、傾城の哲母く、索家の言母し。徳性の厚を究め、道化の本を原ね、順を以て事と為し、貞を以て節と為すに過ぎざるのみ。順・貞以て天下を化すれば、何ぞ往くとして格らざらんや）（巻六、女憲伝）。

(17) 「女冠鳥爪解方音、識得蓬瀛路淺深。戲擲雪花鎔紫磨、漢宮誰數弊寒金（女冠鳥爪方音を解し、識り得たり蓬瀛の路の淺深を。戯れに雪花擲りて紫磨を鎔へる、漢宮誰れか数へん弊寒の金に）。「紫磨」は上等の金。「弊寒金」は、「弊寒」という鳥が吐くという金のこと。宮女が髪飾りとしたことから、ここでは一般の宮女を指したものと解釈できる。耿先生は中主の寵愛を受けていた。

(18) 馬令の「南唐書」巻六に、「后自昭恵俎、常在禁中。後主案府詞有「剗襪歩香階、手提金縷鞋」之類。多伝於外。至納后、乃成礼而已（后昭恵の俎きし自り、常に禁中に在り。後主の樂府詞に「剗襪して香階を歩き、手は金縷の鞋を提ぐ」の類有り。多く外に伝はる。后を納るるに至り、乃ち礼を成すのみ）。引用された詞は、李煜の小周后が、まだ后となる前、李煜と密会していた時に贈られた詞とされる。范洸の詩は、この詞を意識したものである。

(19) 「永和宮詞」の内容については、注（4）前掲論文、及び、近藤光男「清詩選」（集英社、一九六七）を参照。

(20) 「南唐宮詞」較雅、借南唐亡国写福王」（魏中林整理「錢仲

聯講論清詩」蘇州大学出版社、二〇〇四、三八頁）。

(21) 福王政権の内情は、福本雅一「明末清初」（同朋舎出版、一九八四）所収「王鐸」に詳しい。

(22) 「又妙于音律、旧曲有「念家山」、王親演為「念家山破」、其声焦殺、而其名不祥、乃敗徵也（又た音律に妙たり、旧曲に「念家山」有り、王親ら演して「念家山破」を為る、其の声焦殺にして、其の名不祥、乃ち敗徵なり）」（巻五）。また、巻六の周后伝には、「念家山破」が流行したという記述がある。

(23) 「予嘗謂、五代中原之君、史家所謂正統者、皆盜賊僭窃、無足比数。……以南唐為正統、不猶愈于朱温・石敬瑭之流哉（予嘗て謂へらく、五代中原の君、史家の所謂正統者、皆盜賊僭窃にして、比数するに足る無しと。……南唐を以て正統と為すは、猶ほ朱温・石敬瑭の流に愈らざらんや）。「朱温」は、後梁の太祖朱全忠。石敬瑭は、後晋の高祖。

（筑波大学大学院）